

1998（平成12）年度 東京大学 入試問題 第1問（+120字補問） 解答例

*あまりに古い問題で、少なくとも教材や練習問題としては、今の東大受験生には役立たないと思いますが、臓器移植法が施行された1997年の翌年にあえて出題された意図を考え、掲載することにしました。当時は120字問題は出題されておらず、設問（四）「身体的生命はそれ自身の論理を貫いており」とあるが、どういうことか、筆者の論旨にしたがって説明せよ。（二行）」で出題者が問おうとしたことは、本文の要旨の核心の理解です。

一 脳死は、全身の生命活動停止に至る心臓死とは異なり、生を失いつつ死を中断された、人格の発現を一切欠く身体を生じるから。

*比喩「（ある種の）中間的身体」を解答表現として用いないこと。

*脳死が「死」とされるポイントは、「人格の発現をいっさい欠く」ことである。

二 脳死論議は、死の不可逆的進行を人の死と規定することが、脳死身体を利用可能な死体へと転化する点を問うということ。

*傍線部末の「～ということ」に対応した主題「それは」の指示内容も解答化すること。

*「向こうから訪れる死」とは、当然擬人法であり、これを真に受けて「死の側に人間には手の出せない意志があつて、自ら訪れようとする」などとい誤読をしないように。ここはもちろん「脳死」の話であり、「そのまま待っていれば、いずれ全身の死へと必然的に至る」ことを意味している。そして、筆者自身が「死の不可逆的進行」とも述べている。「脳死状態の身体」を先取りして「死体」と「みなす」わけである。

三 人間の道具を超えた現代のテクノロジーによって世界が変質し、人間も主体性を失う得体のしれない状況にあるということ。

*きわめてありがちな失敗として、傍線部自体である「事態の「不気味さ」」の置換説明を忘れないこと。具体的にどのような「事態」を指すのか述べる必要はあるが、それだけでは、傍線部が「どういうことか、説明せよ」という設問要求に答えていない。

四 移植による臓器の受容と復活のうちに、非人格化した身体的存在は、それでもなお人としての生が存続しているということ。

*ポイントはもちろん「身体的生命」の「それ自身の論理を貫く」ということの意味理解である。単に「移植された臓器が移植されて壊死しない」ことではないし、ましてこでも擬人化してしまい「身体が自分の意志で自由に生きている」かのような解答を書かないようにしたい。V・フランクルの「それでも人だ」を筆者は引用している。